

学会ハイライト

第79回日本皮膚科学会東京・東部支部 合同学術大会を終えて

(2016年2月20日, 21日, 京王プラザホテル)

原田 和俊
東京医科大学皮膚科学分野准教授

川口 雅一
山形大学医学部皮膚科学講座准教授

はじめに

2016年2月20日, 21日の2日間, 東京都新宿区の京王プラザホテルにおいて第79回日本皮膚科学会東京・東部支部合同学術大会が開催された。学会会長は東京医科大学皮膚科学分野の坪井良治教授と山形大学医学部皮膚科学講座の鈴木民夫教授である(図1)。1日目は夕方から強い雨模様となったが, 2日目は青空が広がり, 参加人数が気になる事務局としては胸をなで下ろした。

本学会事務局長を務めた東京医科大学の原田和俊と山形大学の川口雅一で学会の報告をさせていただく。

今回の学術大会は25年ぶりに東京支部と東部支部が合同で開催することとなった。日本皮膚科学会は東部支部・東京支部・中部支部・西部支部の4支部に分かれているが, 平成3年まで東部支部と東京支部は「東日本学術大会」として合同で支部総会を開催していた。しかし, 昭和40年代以降全国に医科大学・医学部が新設され, とくに東京およびその近郊に多数の皮膚科学講座が誕生した。その結果, 東部支部に所属する大学の数が急増したため, 平成2年の第54回大会を最後に東部支部から東京支部が分離し, 別々に学術大会が開催されることとなった。今回, 東京支部と東部支部の学術大会を合同で開催することになった経緯は学会ホームページにおける鈴木会長の挨拶文に掲載されているのでここでは述べないが, フォッサマグ



図1 懇親会で挨拶をする坪井(左)・鈴木(右)両会長。

ナより東の皮膚科医が一堂に会する大規模な学会となった。

学会テーマとプログラム

学会のテーマは「皮膚科学いろいろ」である。これは, 皮膚科開業の先生方から基幹病院, 大学病院に勤務する皮膚科の先生, さらには基礎医学に従事する研究医まで, すべての皮膚科学会会員に学会を楽しんでもいただけるよう, 「いろいろ」なプログラムを用意したという意味と, 学会会長の鈴木教授が専門とする色素(いろ)異常症をテーマの1つにしたということを表している。

この学会テーマを受けて, 学会プログラムは坪



図2 シンポジウム「診断にてこずる皮膚疾患」.

井・鈴木両会長の思い入れが強く反映された内容となった。プログラムには坪井教授の専門である細菌および真菌感染症と毛髪疾患、鈴木教授の専門である色素異常を骨子とし、東京医科大学の大井教授がオーガナイズした美容、大久保教授の専門である掌蹠膿疱症、長谷哲男名誉教授の提案による分子標的薬や免疫療法を中心とした悪性腫瘍の治療に関するシンポジウムが組まれた。

また、第1会場は坪井教授の提案により皮膚科医に必要な他科の知識と題し、皮膚科医以外の各科専門医の先生方に、皮膚科診療に役立つ他科の知識をわかりやすく解説いただくこととした。

第2会場は山形大学がプログラム編成を担当し、色素異常症の最新の基礎知識から明日からの皮膚科診療にすぐに役立つシミの診断まで、皮膚の「色」に関する知識がすべて学べるようなプログラムとした。普段あまり聞くことのないメダカの色や動物の皮膚紋様の講演も大盛況であった。

本学会における2つの国際交流講演は第2会場で行われた。講演1では、スペインNational Center for BiotechnologyのLluís Montoliu先生に「Revisiting albinism: update genetics, common feature and potential treatment」と題してご講演いただいた。Montoliu先生は白皮症の世界的な研究

者であり、鈴木教授とも共同研究をされている。講演内容は白皮症の最新の分類や治療の展望などであった。講演2では、米国コロラド大学のRichard Spritz先生に「Genome-wide studies of vitiligo identify 50 contributory genes and highlight novel disease pathway and potential drug targets」と題してご講演いただいた。Spritz先生はここ数年で多数の自己免疫性白斑の感受性遺伝子を同定し、その機能解析を行っているこの分野の第一人者である。今回は白斑の新しい病態についてお話いただいた。先生のラボには山形大の鈴木教授や林昌浩先生、大阪市大の深井和吉先生、近畿大の大磯直毅先生らが留学され現在も交流が続いている。

特別講演は小惑星イトカワから微粒子を持ち帰った探索機「はやぶさ」の運用プロジェクトのリーダー川口淳一郎先生のお話と、日常診療で頭を痛める患者からのクレームについて、トラブル対応の専門家援川聡氏からの講演であった。

その他、東京医科大学の皮膚外科チーフ入澤助教のオーガナイズした皮膚外科のシンポジウムや、重症薬疹のシンポジウム、さらに東京支部プログラム委員会で提案された、診断に苦慮する疾患の鑑別方法および治療や患者さんへの説明が困難な



図3 e-learningで復習する医局員。

疾患に対するアプローチ法に関するシンポジウムも組まれた(図2)。一般演題も221演題と通常の2倍近くの登録数があり、限られた学会の枠のなかに割り振るのがむずかしいという嬉しい悲鳴が学会事務局から上がった。

e-learning

このように、皮膚科学に関する「いろいろ」な内容を組み入れた結果、8会場同時進行のプログラムとなった。複数プログラムを同時並行に進行させる場合、聴きたい演題が複数あり、講演時刻が重なってしまうことがよくある。このことを解消するため、坪井会長の提案でe-learningが取り入れられた。これは、参加証に記載されているIDとパスワードを皮膚科学会のホームページへ入力すると、講演をリアルタイムでパソコンやタブレットで視聴できるシステムである。私も実際に試してみたが、動画は途切れることもなく、画像の解像度も十分であった。さらにこのシステムは学会終了後も1カ月間、講演を視聴することができ、学会の復習も可能である(図3)。今回の学会におけるe-learningのクオリティーを考慮すると、将来、学会へ参加がむずかしい遠方に在住する会員や、子供が小さく外出がむずかしい母親皮膚科医などが、Web配信の講演を聴講することで学会参加の代わりに後実績が得られるようにすることも可能と思われた。



図4 山形の地酒。

カクテルパーティーと懇親会

学会を一日中聴いていると、夕方には疲れがたまってくる。また、学会は普段会うことができない友人と旧交を温めるよい機会でもある。懇親会開始前の1時間、カクテルパーティーと称し、懇親会会場前でシャンパン、ワインが振る舞われた。パーティーの参加者はかなりの数にのぼり、多くの会員がアルコールを片手に友人と会話を楽しみ、学会参加の疲れを癒していた。この試みも成功であったが、懇親会開始時にすでに酔いがまわっている参加者も多く、会長挨拶や支部長の挨拶の際に会場が騒がしかったのが難点であった。

懇親会では山形大学の学生さんによる花笠踊りが披露され、歓談の合間にはマジシャンとクラウンが各テーブルをまわり、マジックと大道芸で参加者を楽しませていた。

また、鈴木教授の尽力により美味しい日本酒の宝庫である山形から蔵元の方々が多数懇親会に参加し、自慢の地酒を振る舞ってくれた(図4)。私(原田)は日本酒に詳しくないので、出された日本酒の価値はわからないが、なかにはネットで購入すると1本数十万円となるものも含まれていたようである。

新しいアイデアが満載

これまで紹介したように今回の学会ではe-learningをはじめとする新しい試みがなされたが、このほかにも通常のスポンサードセミナー以外に製薬会社や医療機器メーカーが主催する聴衆参加型のハンズオンセミナーが開催された。また、支部学術大会では初めてとなる学会用のアプリも作成され、タブレットでプログラムや会場案内を検索することが可能となった。今回はポケットプログラムという小さいプログラム冊子も作成されたため、学会全体のオーバービューはポケットプログラムでチェックし、抄録はアプリで閲覧することが可能であった。厚い抄録集は自宅や医局に保管し、学会会場へ持って行く必要がないと思われた。このことを反映し、学会プログラムの売り上げはあまり良くなかったようである。

アイデアマンである坪井・鈴木両会長から次々に新しい提案が出され、学会をサポートする日本皮膚科学会総会・学術大会チームのメンバーは大変だったと思われる。しかし、このチームは学会開催の「プロ集団」であり、難題を軽々とクリアしていた。今後も、皮膚科関連の学会は皮膚科学会が事務局を担当するが、安心して学会運営を任せられることができると思われる。

これからの支部学術大会

皮膚科学会総会・学術大会は若手皮膚科医を中心とした、卒後教育に重点を置いており、皮膚科

学全般にわたり広く浅くプログラムを組む必要がある。総会において、今回の学会のように会長の思い入れが強い限られた分野に特化したプログラムを組むのはむずかしいのではないと思われる。

本学会では支部学術大会にもかかわらず、開業医、研究医、勤務医など、さまざまなバックグラウンドの皮膚科医すべてに満足していただければ、かつ、会長の専門とするマニアックな分野も掘り下げることが可能なプログラムを組めたと、事務局は密かに自負している。また、学会場所が交通至便な新宿であったこと、学会場の京王プラザホテルの収容規模が十分であったことで、3,000人もの皮膚科医に参加いただけたものと考えている。

東京支部学術大会の開催時期は大きな学会のない2月であり、その他皮膚科関連の学会の開催日程から鑑みてもバランスが良かった。しかし、日本皮膚科学会からの強い要請により2年後からは東京支部も秋に開催される予定であり、9月から12月かけて東部、東京、中部、西部支部学術大会が立て続けに開催されることになる。すべての支部学術大会に出席するのは時間的に厳しく、数年に一度は今回のような合同学会の開催も考慮されてよいと思われる。

最後になりましたが、学会運営にご協力いただいた、東京支部、東部支部の実行委員、プログラム委員の先生方、東京医科大学皮膚科同門会および山形大学皮膚科同門会の先生方に深謝いたします。ありがとうございました。